



菅野 慈 さん（写真左） 森 定 さん（写真右）

風穴は、小学生の頃に遠足で行くなど、子どものときから親しんでいた場所です。国の登録記念物になったことは、環境整備に取り組み、地域の人たちで守ってきた積み重ねが評価されたと感じています。上林の大切な宝なので、これからも変わらない姿で残って欲しいです。



昨年の上林小学校の遠足。風穴や地域の歴史を学ぶ



6月28日@に草刈り作業を行った上林の皆さん

地域を支え、地域で支える。

産業を支えた冷氣

冷蔵設備がない時代、一定の低温を保つことができた風穴は、地域の暮らしを支える自然の恩恵であった。養蚕が盛んだった頃には蚕の卵を保存。冷氣を活用して適切な時期まで孵化を抑えていた。また、杉の種の保管にも使われるなど、古くから地域の産業を支えてきた。

登録までの道のり

国の登録記念物とな

春の桜、夏の山の紅葉、冬の氷瀑。四季折々の美しい景色を見せる場所が、このまちはたくさんある。そんなこのまちで、令和4年度から5年度にかけて行った名勝調査をきっかけに、風穴が国の登録記念物※1となった。そして今、新たに白猪の滝が国の名勝に指定※2されようとしている。

私たちがともに生きてきた場所に、大きな価値が見出され、未来へ繋がる。その動きに人々が寄せる思いを追いかける。

るまでには、幾度もの調査と関係者の粘り強い努力があった。文化庁や県担当者、市職員らが連携し、市内各地の名勝調査を進める中で、風穴にも何度も足を運び、険しい山道を歩きながら現地確認を繰り返した。

現地で得られたデータや文献資料、地域に残る記録などを丁寧に整理し、学術的価値や希少性、地域で守り継がれてきた歴史をまとめた報告書を作成した。

こうした積み重ねが、

国の登録に向けた重要な資料となった。

住民の手で守る

風穴周辺では、毎年、上林観光協会を中心に地元有志が遊歩道など環境整備に取り組む。取材当日、霧が立ち込め視界が悪い中、風穴へ続く道路沿いには草刈りをしている地域の人たちの姿があった。こうした活動は、40年以上にわたって続けられ、今日まで良好な景観が保たれてきた。国の登録記念物となった背景に

は、自然の価値だけでなく、長年にわたり風穴を守り続けてきた地域の歩みも評価された。

次の世代へ受け継ぐ

風穴は、地元の小学生の遠足や多くの人々の憩いの場として親しまれ、地域とともに歩んできた。自然を守り、訪れる人を迎え続けてきた地域の人々の思いは、これからも次の世代へ受け継がれていく。



▲風穴の国記念物登録について

よく知る場所。でもあまり知らない"冷たいワケ"。

昨年3月、風穴は県内で5件目の国の登録記念物となった。標高約960mの上林森林公園にあり、岩の隙間から吹き出す冷氣は、真夏でも周辺をひんやりと包み込む。

そもそも風穴とは、写真中央の柵で囲まれた人工的な穴ではなく、山の斜面に岩と岩が積み重なってできた隙間のことをいう。内部は一年を通して地域の年間平均気温に相当する温度で安定しており、外気との温度差によって空気の流れができる。夏は暖かい空気が風穴上層部から地中に入

り、内部の冷たい空気が岩の隙間から吹き出す。一方冬は、下層部の岩の隙間から冷たい空気が入り、内部の暖かい空気が上層部へ抜ける。この空気の流れは「煙突現象」と呼ばれている。

また、運が良いと見られるのが、幻想的な白い霧。風穴の中と外気との温度差が10度以上になると、空気中の水蒸気が冷やされることで発生する。冷たい空気は暖かい空気より重いので、霧は地面を這うように流れ、幻想的な風景を作り出す。



▲地中と外気の温度差によって空気が出入りする「煙突現象」



風穴までの道中を草刈り



林内会

※写真は一部の主要会員

会長 長曾我部 立男 さん（写真左）

地元の有志を中心とした団体。令和元年発足。近藤林内の名を借りる。白猪の滝から唐岬の滝まで子規と漱石が歩いた道の整備や、林内墓地の維持管理などを行う。



唐岬の滝。白猪の滝が「雄滝」と言われるのに対し、「雌滝」と言われる。



東谷小学校の子どもたちに、子規と漱石が白猪の滝を訪れたことを伝える佐伯さん。

「やらんといかん」。誇りを胸に動き出す。

ここからリスタート

答申を受けて動き出そうとしているのが、地元の有志「林内会」だ。白猪の滝から唐岬の滝まで、子規と漱石が歩いた道を整備しようとしている。

会長の長曾我部立男さんは「子規と漱石が白猪の滝と唐岬の滝を訪れたように、地元にとっては二つの滝は対。なんとかして二つの滝を見てもらいたい」と話す。しかし白猪の滝までの道は歩きやすく整備されている一方、その先の唐岬の滝までの道は険しく、訪れる

人は少ない。

長曾我部さんは、『のぼさんの道』の著者、故高須賀康夫先生が、子規と漱石の歩いたルートを調べていたのに続いて、私たち林内会が調査をしてきました。ルートが分かり、道を整備して簡単な橋をかけようとかかなり具体的に計画し、さあやるぞ、というときに新型コロナウイルスが流行。活動は中断してしまい、再開できずにいました。そんなとき、国の名勝に指定されることとなったので『やらんといかん』と話しています」と語る。

地域の宝を未来へ

林内会に入り、集落支援員としても河之内の活性化に尽力する佐伯敦さんは、子どもたちに二つの滝にまつわる歴史を伝えたり、子ども向けの本「近藤林内物語」を作って東谷小学校区に全戸配布するなど、地域の歴史を懸命に伝えてきた。

「人口減少が進む河之内で、何か地域が盛り上がるきっかけが欲しいと思います、龍を使った町おこしなどをしてみました。そんなときに白猪の滝が国の名勝に指定されるこ

白猪の滝、国の名勝指定へ。

白猪の滝が、新たに国の名勝に指定されようとしている。6月19日(金)に、国の文化審議会から、国の名勝に指定するよう文部科学大臣に答申された。

「子規と漱石が訪れたことは意外と知られていない」。そう地元の人は話す。そもそもなぜ、二人はこの地を訪れたのだろうか。それを語る上で欠かせないキーパーソンが、近藤林内だ。林内は、白猪の滝とその先にある唐岬の滝までの道を整備した。俳諧も嗜み、文人らと交流を深める中で、

凍った滝を一目見ようと、冬には県内外から多くの人が足を運ぶ。その幻想的な冬の景色はもちろん、夏は緑、秋は紅葉と、季節ごとに違った美しい顔を見せる。また、正岡子規や夏目漱石などが訪

二つの滝の存在が知られていったと考えられる。子規が観瀑に来た明治24年8月と漱石が来た明治28年11月、林内は既に亡くなっていたが、林内と遠縁の同行者を介し、二人とも林内の生家に泊まった。二つの滝までの道を整備した林内と近藤家の活動が今に繋がりを、ついには国の名勝指定に至ろうとしているのだ。

誰聞くに秋をつき出す 滝の音

二人が見た秋の滝

滝までの道中には、子規の句「追いつめた鶴鴒見えす 溪の景」、漱石の句「雲来り雲去る瀑の紅葉かな」が書かれた石碑や看板が建てられている。しかし詠まれた俳句はこれらだけではない。

子規は宿泊のお礼として、近藤家に短歌「見渡せば雪かともがふしらいとの滝のたえまはもみじなりけり」や、俳句「誰聞



白猪の滝。落差は84 m。



近藤 林内

文政元年～明治21年
(1818年～1888年)

河之内生まれ。白猪の滝と唐岬の滝までの道を整備し、世の中に広めたとされる。

酒造業を営み、裕福であったが真面目に働き贅沢をせず、貧しい人に米や金を分け与え、学校や道路などを作るために多額の寄附をした。人々から尊敬され、河之内の多くの人が林内と同じ近藤姓を名乗った。

くに秋をつき出す 滝の音」を送った。また漱石は近藤家を出て二つの滝を訪れる中で50もの句を詠み、俳句の師匠であった子規に送っていた(5ページ下部に一部抜粋)。子規は辛辣な評価を下し、二重丸をつけたのは2句だけであった。

白猪の滝といえば、多くの人が冬の氷瀑を思い浮かべるが、子規と漱石が訪れたのは夏の終わから秋。二人に思いを馳せながら、秋の滝を見るのも面白いかもしれない。

誰が家ぞ白菊ばかり乱る、は

(○)

鎌倉堂野分の中に傾けり

(マヅイ)

鎌さして案内の出たり 滝紅葉
(こんな処は文学的ノ見付場なるまじ)

嬬の家独り宿かる 夜寒かな
(人聞きのワルイ句也)

山紅葉 雨の中行く 滝見かな
(滝見などハ俗な言葉也)

瀑五段一段毎の紅葉哉

(陳也 拙也)

雲来り雲去る瀑の紅葉かな

(○)

瀑半分半分をかくす 紅葉かな

(拙句)

大滝を北へ落とすや 秋の山
秋風や 真北へ瀑を吹き落とす

(こんな句でハ吾見得意の
秋山の句になるまじ)

唐黍を干すや谷間の一軒家

(○)

▲近藤家を出て白猪の滝と唐岬の滝を観瀑する旅で、漱石が詠んだ俳句。カッコ内は子規の批評。「のぼさんの道」著：高須賀康夫 から一部抜粋。

参考文献：市名勝調査報告書、川内町誌